

新儒教（概要）

以下では、新儒教の創造主は新儒教を創造する。下記は憲法でなく、人工的な世界の創造である。たとえある主体が下記を嫌うとしても、もしその主体が自己の人工的な世界を創造することができないならば、その主体は飲み込まれるだろう。

0.0（呼称）

彼はこの宗教を新儒教と呼ぶ。彼は新儒教の信仰者を「新儒教徒」と呼ぶ。筆者はその略称を「儒教徒」と呼ぶ。

0.1（宗教）

彼は宗教を自己の系（system）と契約する。彼はsystemの日本語訳を「世界系」、または「競技系」と便宜的に契約する。契約は儒教系統の契約である。

0.2（新儒教）

彼は新儒教を文明宗教と認識する、かつそのように契約する。彼は新儒教を東洋文明における中心的な宗教と契約する。彼は新儒教は東洋文明に所属すると契約する。彼は次の思考規範「もしある主体が新儒教徒であるならば、その主体は東洋文明に所属する」を契約する。彼は新儒教という世界系の動力を自己とその（儒教系統の）意志と力と契約する。

0.3（語族と人種）

彼は新儒教の言語を日琉語族及びシナチベット語族と朝鮮語族とアルタイ語族（諸語）とウラル語族の一部と契約する。彼は新儒教の中心的な人種をモンゴロイド人種、特に新モンゴロイド人種と契約する。彼はモンゴロイド人種の自然な生息地、特に新儒教の中心的な地域を東洋地域と契約する。

0.4（創造主）

新儒教の創造主は新儒教の統治者でない。創造主は統治行為を実行しない。世界系の創造主はその系の統治者及び選手、言い換えると競技者によって保護される。

1.0 目的

1.1（x教系統の目的）

x教系統の目的はx教徒が持つ目的である。目的は（ある主体が）実現する存在及び状態、運動である。彼は新儒教における目的は新儒教系統の目的であると契約する。

1.2（儒教系統の目的）

彼は新儒教の目的を自己の儒教系統の社会を形成することと契約する。彼は新儒教の主要な目的を次のように契約する。"ら"には、仏教徒などが含まれる。

- (1) 新儒教徒らが礼節ある世界系（礼に沿った世界系）を形成する。
- (2) 新儒教徒らがその世界の中でより人間的になる。
- (3) 新儒教徒らが西欧文明及び西欧キリスト教及び異文明と対峙する。
- (4) 新儒教徒らが西欧文明よりも既存のどの文明よりもより素晴らしい文明を形成する。

さらに、彼は新儒教の主要な目的を次のように契約する。

- (1) 新儒教徒らがアメリカ大陸をアメリカ先住民とモンゴロイド人種のために奪還する。
- (2) 新儒教徒らが人間界における、特にオセアニアやアメリカ大陸における白人帝国主義と植民地主義と奴隷地主義と不可触民地主義を終了させる。
- (3) 新儒教徒らが宇宙を含む世界のどこでも永続的に機能するシステムを形成する。

1.3 (創造主による認識の決定)

創造主のみがx教系統の目的を創造する。創造主のみがx教系統の目的を決定する。

2.0 世界認識

2.1 (x教系統の認識)

x教系統の認識はx教徒が持つ認識である。彼は世界を儒教系統の認識で認識する。

2.2 (儒教系統の世界認識)

彼は世界を物質的なものと動物的なものと人間的なものと"儒教系統の認識"で認識する、またはそれらの組と儒教系統の認識で認識する。彼は物質は完全に自動的に運動すると儒教系統の認識で認識する。彼は動物はより非自動的に運動すると儒教系統の認識で認識する。彼は人間はより目的的に運動すると儒教系統の認識で認識する。

2.3 (認識の順序)

彼は世界を大局から局所へと儒教系統の認識で認識する。

2.4 (3つの意志の存在の仮定)

彼は機械意志と自由意志と目的意志を便宜的に仮定する。

- (1) 彼は物質は機械意志、または自動意志を持つと仮定する。
- (2) 彼は動物は自由意志を持つと仮定する。
- (3) 彼は人間は目的意志を持つと仮定する。

ただし、彼はx教系統の人間はx教系統の目的意志を持つと仮定する。意志の定義、または認識は現時点では不明であるが、彼は便宜的な認識を提示する。意志はある種の運動をある種の力で引き起こす能力である。意志はある種の運動をある種の力で引き起こすことができる状態である。機械意志は自動的な運動を自動的な力で引き起こす能力である。自由意志は非自動的な運動を非自動的な力で引き起こす能力である。目的意志は目的的な運動を目的的な力で引き起こす能力である。

2.5 (3つの主体)

彼は機械主体と自由主体と目的主体を便宜的に仮定する。機械主体は機械意志を持つ主体である。自由主体は自由意志を持つ主体である。目的主体は目的意志を持つ主体である。ただし、x教系統の目的主体はx教系統の目的意志を持つ主体である。

2.6 (創造主による認識の決定)

創造主のみがx教系統の認識を創造する。創造主のみがx教系統の認識を決定する。

3.0 人間

3.1 (人間)

x教系統の人間はx教系統の人間性を創造主によって授けられたサピエンスである。x教系統の人間性はx教系統の人間を動物から区別する性質である。人間性の一つには、x教系統の善悪が存在して、それはx教系統の人間を動物から区別する。

3.2 (儒教系統の人間)

儒教系統の人間は儒教系統の人間性を授けられたサピエンスである。彼は儒教系統の人間を物質性と動物性と儒教系統の人間性、またはそれらの組みと儒教系統の認識で認識する。

3.3 (人間界の創造主による人間性の付与)

人間界の創造主は儒教系統の人間性を信仰者に授ける。彼は儒教系統の人間を泥からでなく、ホモ・サピエンスを必要な対象としてサピエンスから創造する。

3.4 (儒教系統の人間の本質)

彼は儒教系統の人間の本質を自由意志と儒教系統の認識で認識しない。彼は動物の本質を自由意志と儒教系統の認識で認識する。

3.5 (創造主による人間の決定)

創造主のみがx教系統の人間を創造する。創造主のみがx教系統の人間を決定する。

3.6 (創造主の死と人間性の剥奪)

もし創造主、または創造主階級が死ぬならば、x教系統の人間性はx教系統の人間から奪われる。

4.0 自己

下記では、彼は"儒教系統の認識で"を省略する。

4.1 (自己)

x教系統の自己はx教徒が認識する、または信仰する自己である。儒教系統の自己は儒教徒が認識する自己である。

4.1 (儒教系統の自己)

彼は儒教を儒教系統の自己と認識する。彼は東洋文明を儒教系統の自己と認識する。

4.2 (自己の人種)

彼は自己の人種をモンゴロイド人種と認識する。彼は自己の小人種を東洋小人種（新モンゴロイド人種）と認識する。ただし、その小人種は縄文人や古モンゴロイド人種に遺伝的に寄っているかも。小人種は人種の部分集合である。彼はアメリカ先住民のほとんどをモンゴロイド人種、またはその近縁種と認識する。彼は東南アジア人のほとんどをモンゴロイド人種と認識する。

4.3 (自己の視点)

彼は自己の人種的な視点をモンゴロイド人種視点と認識する。彼は自己の小人種的な視点を東洋小人種視点と認識する。

4.4 (創造主による自己の決定)

創造主のみがx教系統の自己を創造する。創造主のみがx教系統の自己を決定する。

5.0 善悪

5.1 (善悪)

x教系統の善悪はx教徒が持つ善悪である。儒教系統の善悪は儒教徒が持つ善悪である。彼は善悪は運動競技におけるレッドカードと例える。

5.2 (目的による善悪の正当化)

x系統の目的はx教系統の目的である。x系統の目的がx系統の善悪を正当化、断定する。彼は目的に反することを悪いと判断する。彼は目的に沿うことを善と判断する。

5.3 (儒教系統の善悪)

彼は儒教系統の目的に反することを悪いと判断する。彼は儒教系統の目的に沿うことを善と判断する。彼は儒教系統の目的に沿うことを悪いと判断する。

5.4 (礼)

目的における1.2 (1) により、彼は礼に沿うことを善と判断する。彼は礼に反することを悪いと判断する。彼は失礼を悪いと判断する。彼は無礼を悪いと判断する。彼は非礼を悪いと判断する。

5.5 (陰陽一体)

彼は善悪二元論でなく、陰陽一体を取ることを契約する。もしある主体が悪を実行するならば、彼はより悪を実行する。

5.6 (創造主による善悪の決定)

創造主のみがx教系統の善悪を創造する。創造主のみがx教系統の善悪を決定する。

6.0 性

6.1 (性)

x教系統の性はx教徒が持つ性である。儒教系統の性は儒教徒が持つ性である。

6.2 (儒教系統の性)

彼は儒教系統の男をサピエンスの雄から区別する。彼は儒教系統の女をサピエンスの雌から区別する。彼は雌雄の区別や男女の区別を認識する、かつその区別をはっきりさせる。

6.3 (x教系統の男とx教系統の女)

x教系統の男はx教徒である男である。x教系統の女はx教徒である女である。儒教系統の男は儒教徒である男である。儒教系統の女は儒教徒である女である。

6.4 (善悪及び認識、そして判断の性)

彼は善悪及び認識、判断における性を認識する。彼はx教系統の男性系統のx教系統の善悪をx教系統の女系統のx教系統の善悪から区別する。彼はx教系統の男性系統のx教系統の善悪をx教系統の男系善悪と呼ぶ。女性も同様である。彼はx教系統の男系認識をx教系統の女系認識から区別する。彼はx教系統の男系判断をx教系統の女系判断から区別する。

6.5 (創造主による性のあり方の決定)

創造主のみがx教系統の性を創造する。創造主のみがx教系統の性を決定する。

7.0 富

7.1 (富)

x教系統の富はx教徒が持つ富である。儒教系統の富は儒教徒が持つ富である。x教系統の富はx教系統の人間がx教系統的に所有する対象である。

7.2 (所有)

x教系統の所有はx教徒が実行する所有である。儒教系統の所有は儒教徒が実行する所有である。所有の主体はx教系統の人間である。

7.3 (儒教系統の富及び所有)

人間のみが富を所有する。儒教系統の所有の主体はx教系統の人間である。彼は儒教系統の富を社会的な対象と認識する。彼は儒教系統の富を世界系に必要な対象と認識する。彼は儒教系統の富を世界系を作る原因と認識しない。

7.4 (儒教系統の富及び所有と性)

彼は儒教系統の男系富を儒教系統の女系富から区別する。彼は儒教系統の男系所有を儒教系統の女系所有から区別する。

7.5 (富の保障)

もしある儒教徒が自己の儒教系統の社会を作るつもりがないならば、その主体の富は保障及び保護されない。もしある儒教徒が創造主の儒教系統の目的に反するならば、その主体の富は保障及び保護されない、かつ正当に没収される。

7.6 (創造主による富及び所有の創造とその正当性)

創造主がx教系統の富及び所有を創造した、かつ富の善性を正当化した。儒教の創造主が儒教系統の富及び所有を創造した、かつ儒教系統の富の善性を正当化した。ただし、0.4 (創造主) により、創造主が統治行為を実行しない。

7.7 (創造主による富の所有)

理論的には、創造主が全ての儒教系統の富を儒教系統の所有で所有する。または、理論的には、彼が儒教系統の富を儒教系統の所有の使用料を取る。もしある主体があるシステムを創造するならば、その主体がそのシステムを所有する。もしある主体がある対象を創造するならば、その主体がその対象を所有する。

7.8 (富の取り扱い)

新儒教徒は儒教系統の富の規範に沿って、彼らの儒教系統の富を儒教系統の目的意志で目的的に取り扱う。

7.9 (創造主の死)

もし創造主、または創造主階級が死ぬならば、x教系統の富はx教系統の人間から奪われる。

7.10 (創造主による富の決定)

創造主のみが富を創造する。創造主のみが富を決定する。

7.11 (人間と富)

彼は人間及び人間の集合を富と認識しない。ただし、宗教を一種のシステムと仮定すると、創造主がそのシステムを所有する、かつそのシステムを富と認識することは唯一の例外である。

7.12 (アメリカ大陸及びその上の資源)

彼はアメリカ大陸及びその上の資源を西欧白人の富と認識しない。正確には、彼はアメリカ大陸及びその上の資源を西欧白人の比較的に自然な富と認識しない。彼はアメリカ大陸及びその上の資源をモンゴロイド人種の比較的に自然な富と認識する。

8.0 契約

8.1 (契約)

x教系統の契約はx教徒が結ぶ契約である。儒教系統の契約は儒教徒が結ぶ契約である。彼はx教系統の男系契約をx教系統の女系契約から区別する。

8.2 (儒教系統の契約)

彼は自由契約とx教系統の目的契約を認識する。自由契約は自由意志による契約である。x教系統の目的契約はx教系統の目的意志による契約である。自由意志による合意が自由契約の善性を正当化する。x教系統の目的意志による合意がx教系統の目的契約の善性を正当化する。儒教系統の目的意志による合意が儒教系統の目的契約の善性を正当化する。

8.3 (契約の強さ)

x教系統の目的契約は自由契約よりも強い。

8.4 (認識と契約)

彼はx教系統の認識を一種の特殊な契約と認識する。彼はx教系統の認識に基づいた自由契約とx教系統の認識に基づいたx教系統の目的契約を認識する。彼は前者を自由認識契約と呼ぶ、彼は後者をx教系統の目的認識契約と呼ぶ。

8.5 (契約と創造主)

契約の主体は系における要素同士である。創造主のみがx教系統の契約を創造する。創造主のみがx教系統の契約を決定する。

9.0 死生観

9.1 (死生観)

x教系統の死生観はx教徒が信仰する死生観である。儒教系統の死生観は儒教徒が信仰する死生観である。彼はx教系統の男系死生観をx教系統の女系死生観から区別する。

9.2 (儒教系統の死生観)

彼は儒教系統の死生観を彼の子孫の永続性や新儒教の永続性に重ね合わせる。彼は自己の永続性を男系子孫の永続性に重ね合わせる。彼は自己の永続性を儒教や東洋文明の永続性に重ね合わせる。彼は9.2と9.4を組み合わせ、現時点では比較的現実的な死生観を構築する。

9.3 (生きることと死ぬこと)

ある儒教徒が人間として生きているとは、彼が儒教系の中で競技していることである。ある儒教徒が人間として死ぬとは、彼が任意の宗教から退場することである。

9.4 (死後の状態)

動詞の過去形は一種の状態である、かつその状態は主体に現在、纏わりつく。その主体が過去の状態を今現在着ていると解釈する、かつこれを儒教系統の死生観に応用すると、もしある存在が崩壊するならば、その存在は状態になる、かつその状態は物質世界や儒教系に永続的に纏わりつく。もし物質世界及びその上の儒教系が永続的であるならば、その存在のその状態もまた永続的である。

9.5 (創造主と生と死)

創造主のみがx教系統の人間の生と死を創造する。創造主のみがx教系統の人間の生と死を決定する。

10.0 刑罰

10.1 (刑罰)

x教系統の刑罰はx教徒がかす刑罰である。儒教系統の刑罰は儒教徒がかす刑罰である。彼はx教系統の男系刑罰をx教系統の女系刑罰から区別する。

10.2 (儒教系統の刑罰の主体)

もしある主体が儒教系統の善悪を持っていないならば、その主体は儒教系統の刑罰を下さない。もしある主体が儒教系統の善悪を正しく扱えないならば、その主体は儒教系統の刑罰を下さない。

10.3 (刑罰の主体の正当性)

もし刑罰の主体の善性が正当化されるならば、その主体は儒教系統の善悪を所有する、かつその主体がその善悪を正しく扱う。その善悪を正しく扱うことはその善悪を正しく判断することである。刑罰の主要な主体は統治者階級である。

10.4 (刑罰の目的)

彼は儒教系統の目的を次のように契約する。

- (1) 儒教系統の刑罰の目的は何かを懲らしめることでない。
- (2) 儒教系統の刑罰は秩序を与える。
- (3) 儒教系統の刑罰は損害の相互性（作用反作用性）を埋め合わせさせる。
- (4) 儒教系統の刑罰は一種の統治行為である。
- (5) 儒教系統の刑罰は敵及び反社会的集団、その他を淘汰させる。

10.5 (3種類の刑罰)

彼は機械に対する儒教系統の刑罰と動物に対する儒教系統の刑罰と人間に対する儒教系統の刑罰を科す。

- (1) もしある主体が機械的であるならば、その主体は機械に対する儒教系統の刑罰を科される。
- (2) もしある主体が動物的であるならば、その主体は動物に対する儒教系統の刑罰を科される。
- (3) もしある主体が人間的であるならば、その主体は人間に対する儒教系統の刑罰を科される。

10.6 (違反と損害)

もしある主体が損害をある対象に与えるならば、その主体はその損害に関する刑罰を加えられる。もしもしある主体が損害をある対象に与えないならば、その主体はその損害に関する刑罰を加えられない。彼が契約するのは、刑罰は損害に対してかされる。彼が契約するのは、ある決まりに対する違反に対して課されない。

10.7 (儒教系統の損害)

x教系統の損害はx教において計算される損害である。儒教系統の損害は儒教において計算される損害である。もしある主体が儒教系統の刑罰に科されるならば、その主体は儒教系統の損害を別の主体に加える。

10.8（責任と応答義務）

彼は応答義務を自由意志に関する応答義務とx教系統の目的意志に関するx教系統の応答義務に分類する。もしある主体が自由意志で行為するならば、その主体は自由意志に関する応答義務（動物的応答義務）を果たす。もしある主体がx教系統の目的意志でx教系統の行為を実行するならば、x教徒がx教系統の目的意志に関する応答義務（人間的応答義務）を果たす。

10.9（創造主と刑罰）

創造主のみがx教系統の刑罰を創造する。創造主のみがx教系統の刑罰を決定する。

10.10（刑罰の正当性）

もしあるx教系統の刑罰がx教徒に対する正当性を持たないならば、その刑罰体系における死刑は刑罰でなく殺害である。